

この日の学校とは

『この日の学校』とは、〈IN 新潟に寄せて〉

『この日の学校』は受験や資格取得のためではなく、人が人として自らを成長させるための学問を行う場です。

==スポーツや音楽ではなく、学問、それも数学で25歳の若者が人の心に火をつける。==

今から10年前、物事の本質を探究することをせず、ただ暗記を強要し、「なぜ？」を問うことを許さぬ受験教育に人間不信を抱きかけていた中学生は、唯一自分にとって生きる張り合いとなっていたバスケットボールを通して、武術研究者甲野善紀氏に出会う。

その出会いは、一人の講師と、百人を超える見学者のうちの一人名だったが、決定的な何かをこの中学生”森田真生君”に与えた。（この出会いに関しては、Web magazine Re:s リすの連載“ほころび”の第8回目、2010年2月アップをご覧ください）

以降、バスケットに打ち込みつつ、学問とも向き合い、バスケは、高校の時、ムック本『古武術バスケットボール 桐朋高校の身体運用法の取り組み』（2004年1月発行・日本文化出版）に、最も多く登場している。そして、桐朋高校をトップの成績で卒業後、東京大学文科Ⅱ類に進学。「人間いかに生きるべきか学科」があればそこに入りたかったというこの大学生、森田真生氏は、その後様々なジャンルと交流し、また渡米して人脈を広げ（氏の英語力はTOEIC 990点）、ロボット研究にひとつの可能性を見出して、この分野に進む。

2008年工学部を卒業するが、その直前に、数学に自らの進むべき道を見出し、猛勉強して数学科に合格。そして2010年東京大学創立以来、初めて文系で入学して、数学科も卒業した人物となる。

卒業約半年前から行っている甲野善紀氏との「この日の学校」、また、一人で行っている「数学の演奏会」を通して、「数学は心と身体を整える」という思想を展開中。「この日の学校」はこの稀有な若者、森田真生氏を世に出すことで、森田氏にとっても、出会った人々にとっても、新しい世界が拓けることを確信した甲野氏が発案し、森田氏と二人で立ち上げたものである。

今回の新潟では、武術界では知る人ぞ知る実力者で、甲野氏の盟友ともいえる光岡英稔氏（韓氏意拳日本代表）をはじめとするゲストが、身体、言語、存在といった人間にとっての根本問題を起し、極めて濃い密度と深い内容の講座になることが予想される。

森田真生氏については、その稀有な能力とさわやかな人柄について、「彼と話していると、自分がものを知らないことが痛快に思えてくる」と、ユニークな論評をするのは、現在多くのメディアで活躍中の精神科医、名越康文氏である。

「この日の学校」を発案した甲野善紀氏は、現在古武術研究の第一人者としてかなり知られているが、その活動は武術にとどまらず、スポーツ、楽器演奏、介護、工学等々へと、多くのジャンルに展開している。

例えば甲野氏に学んだ岡田慎一郎氏は、現在“介護界の革命児”と言われるほどの活躍ぶりで、年300回以上の講座や講習会に席の暖まる暇もない状態である。

工学では、現在の日本のロボット研究を引っ張っている中心人物の一人である國吉康夫東京大学教授は、甲野氏の動きを実際に測定し、甲野氏と検討を重ね、その感想を『身体を通して時代を読む』（甲野善紀氏と神戸女学院大学の内田樹教授との共著）の「文庫本の「解説」」の中で『ロボティク

スの教科書を一ページ目からすべて書き換えなければいけないのではないかとさえかんがえている…』と述べている。

また、既に数冊の共著があり、2010年8月号の中央公論誌でも甲野氏と対談した養老孟司東京大学名誉教授は、身体性が希薄になっている現在の日本において甲野氏の存在自体が貴重であると高く評価している。

森田 真生氏 のコメント

1. 「この日の学校」とは

現代を生きている私たちの多くは「学校」を経験しています。義務教育だけでも人生のうちの9年間を、大学まで進学する人は、人生のうちの15年以上を「学校」という場所で過ごしています。

いまではそれがほとんど当たり前になってしまいましたが、考えてみれば「学校」とい仕組みが確立してから、まだほんの100年ほどしか経っていません。人生の大切な時間を、雨の日も晴れの日も、教室という場所で過ごし、机にじっと座って、先生が黒板に書く内容を書き写すことに捧げるとい文化は、ほんの最近はじまったことに過ぎません。

私は、現在の学校のあり方は、過渡的なものに過ぎず、どこにいても世界中の情報にアクセスできる現代のライフスタイルにより即した学校のあり方があるはずだと信じています。

「この日の学校」は、そのような新しい学校のありかたを模索する実験的な試みです。受験や就職のためではなく、「人はなんのために生きているのか」「よりよく生きるとはどういうことか」という素朴な問いに、世代や専門分野を超えてともに考えていくことができる、そのような場を全国各地で立ち上げていきたいと思っています。

2. 誰が、何を学ぶのか？

現在の学校の制度の最大の欠陥のひとつは、世代を超えた交流の欠如にあると思っています。私自身、文化系で大学に入学し、途中で数学科に転校する際に励ましてくださったのは10歳年上の先輩でした。

同級生がみな一様に「文系で入学しておいて、数学科に転向するなんて不可能だ」という中で、「まだ若いんだから、まったく問題ない」とアドバイスしてくれた先輩がいなければ、僕は決して数学科へ転向する決断はできなかったと思います。

この日の学校は、あらゆる世代の、あらゆる分野の人に開かれた学校です。

そこで、世代や分野を超えて知恵を出し合い、人が生きることの真の意味を模索していきます。

3. 新潟開催へ向けての展望

数学は論理的で冷たい学問であるという印象を多くの方が抱かれていると思います。

しかし、数学者は「論理で語れることだけを語る」という倫理を徹底して守ることによって、ことばの無駄遣いを極力回避し、そのことによって逆に「論理では語り得ないこと」の領域をはっきりさせようとしているのです。

そうした意味で、数学者の言語に対する態度は特異であると言えるでしょう。

今回のこの日の学校では、「言語と記号と数学」の差異についての考察を出発点に、世界を構成するという事、新しい倫理や道徳をつくるということ、脳の外で思考すること、などについて皆さんとともに議論を深めていきたいと思っています。

光岡 英稔氏のコメント

人は生きているからこそ人であり 人は生物ではなく生人である—

物でない人は生きている故に生きて行くことが問え、生きているからこそ“生きている物”との共鳴を感じ問うことが許されてるのかも知れない。

私などは数学の素人であるばかりか、どちらかと言うと正規の学校教育で受けた数学は苦手な方であった、しかしながら森田氏の「この日の学校」での数学の印象は私が正規の学校教育で受けた“答を求める為の数学”とは異なる“人の問う力を養う為の数学”であった。

「この日の学校」は私のような素人の数学に対する固定観念を打破してくれると同時に数学が持つ本来の可能性を私達に提示してくれている様にも思われる。

未だ嘗てない数学への一歩が踏み出されつつ在中、その場に立ち会えられる光栄さと同時に何かを学ぶ事とは自らが問い、自らがその都度答えを導き出せる学問本来の姿への原点復帰が必然に迫られているよう感じずにはいられない。

学ぶことの意味を見失いかけている今の世の中で学問が原点に戻るため必然的に自然発生したのが「この日の学校」であるようにも感じられる。

私達の内にある世界と外の世界が共鳴しこれ等の数、記号、言葉に意味や価値が生じ、人から生じた数、記号、言葉が我々の感覚に整いを与えてくれ自然が姿を覗かせてくれる瞬間がある。

その瞬間を捉えられる場が人には必要であり結論や結果のみを求める数学から数学を媒体し人が生きていることへの意味を見出す試みの場として「この日の学校」の存在が試されて行くのではないだろうか。

私個人としては「この日の学校」が数学を行う場ではなく数学を通じて人が人として生きて行く楽しみを知りゆく場になる姿を今後とも見守っていきたいと思う。しかしながらこの様な必然は我々の健闘を待つ事もなく自ら然りなっていくであろう—。